

平成24年度沖縄群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

I 2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	50	40	40
平 年 並	30	30	30
低い(少ない)	20	30	30

(平成25年1月25日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.1	19.8	14.8	119.7	87.1

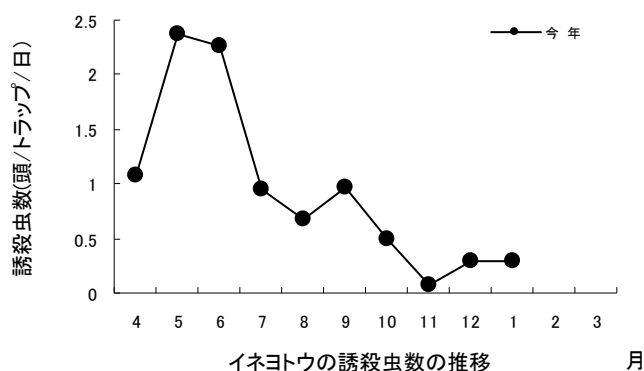
(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 2月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

○ イネヨトウの防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は8.0%(前年17.1%)であった。
- b 1月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.3頭であった。
- c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 夏植えの培土時や春植えの植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を施用する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

2 かんきつ

- ミカンハダニの防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、たんかんにおける葉当たり虫数は、0.1頭（前年0.1頭未満、平年1.3頭）と平年並、寄生葉率は6.2%（前年0%平年3.4%）で平年より高かった。
 - b 温州みかんにおける葉当たり虫数は、0.1頭（前年0.1頭未満、平年0.2頭）と平年よりやや多く、寄生葉率は4.9%（前年1.8%、平年2.8%）で平年より高かったが、一部の園で発生が多かった。
 - c 収穫後から花芽発生前までに、天敵に影響の少ない薬剤で防除を行う。

3 マンゴー

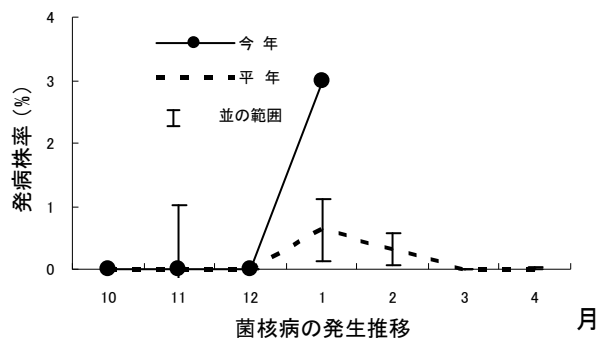
- 炭疽病の防除対策
 - a 本病は、出雷前の芽に潜在感染するので、着果後の被害軽減のため、この時期からの予防に努める。
 - b 不要な新梢や罹病した枝葉は発生源となるため、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
 - c 出蕾がみられる園では、花芽に対して薬害の少ない薬剤を選定する。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、一部圃場で発生がみられた。
 - b 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見、早期防除に努める。
 - c 混合花の新葉や不用な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘葉する。
 - d 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ハダニ類の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、葉当たり雌成虫数は0.6頭（前年0.1頭未満、平年0.1頭）と平年より多かったが、一部圃場で発生が多くみられた。
 - b 発生していた主な種はシュレイツメハダニであった。
 - c 出蕾がみられる園では、花芽に対して薬害の少ない薬剤を選定する。

4 レタス

(1) 菌核病

発生程度 : 多
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は3.0%（前年1.5%、平年0.6%）と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
- b 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。
- c 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

5 きゅうり(施設)

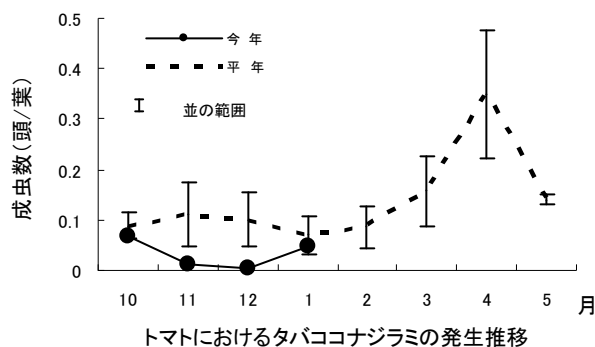
- うどんこ病の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は4.3%(前年14.0%、平年11.5%)と平年よりやや少なく、一部圃場で発生が多くみられた。
 - b 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
 - c 除去した葉は圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- べと病の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は0.5%(前年0%、平年6.3%)と平年よりやや少なく、一部圃場で発生が多くみられた。
 - b 湿度が高く、気温が20℃前後の時によく発生することから、換気を十分に行う。
 - c 病徴がみられたら、治療剤を葉の表裏ともに掛け残しがないよう丁寧に散布する。
 - d 被害葉は施設内から持ち出し処分する。

6 にがうり(施設)

- うどんこ病の防除対策
 - a 1月下旬の調査の結果、発病葉率は0.8%(前年4.0%、平年2.7%)と平年よりやや少なく、一部圃場で発生が多くみられた。
 - b 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
 - c 除去した葉は圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。

7 トマト

- (1) タバココナジラミ
発生程度 : 並
予報の根拠
1月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.05頭(前年0.08頭、平年0.07頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 本種はトマト黄化葉巻病を媒介する。
- b 多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
- c 施設開口部には0.6mm以下の目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- d 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- e 幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- f 薬剤散布の際にはマルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。
- g 平成24年度病害虫発生予察技術情報第6号(平成24年9月28日付)参照。

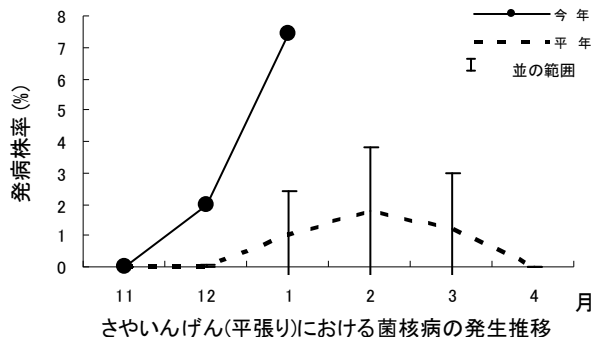
8 さやいんげん(平張り)

(1) 菌核病

発生程度 : 多

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病株率は7.4%(前年8.8%、平年1.8%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- 多湿時に発生しやすいので、不要な老葉・下葉を除去し、透光通風を良くする。
- 発病部位は早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- 平成23年度病害虫発生予察技術情報第9号(平成24年2月1日付)参照。

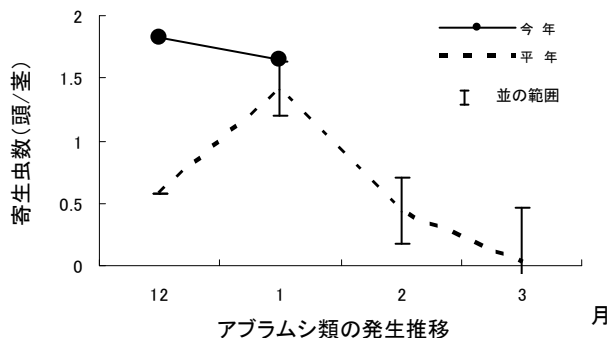
9 小ぎく(彼岸出荷用)

(1) アブラムシ類

発生程度 : 並

予報の根拠

1月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は1.7頭(前年0.4頭、平年1.4頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- シルバーポリテープを畦上に張り出すか吊したり等して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。

○ 白さび病の防除対策

- 1月下旬の関係機関からの情報によると、沖縄本島北～中部、伊江島および久米島で本病の発生・増加が確認されている。
- 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。
- 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
- 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
- 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
- 栽培終了後は近隣圃場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

- カメムシ類の防除対策
 - a カメムシ類は吸汁により生長点の芯止まり、茎の曲がり、花の奇形を引き起こす。
 - b 1月現在、発生の確認されている種は主にウスモンミドリカスミカメである。
 - c 圃場周辺の雑草や収穫終了圃場の残渣は発生源となるので、早めに除去する。

- アザミウマ類の防除対策
 - a 1月の病害虫防除員からの報告によると、沖縄北部及び久米島の一部圃場のキク上位部で、アザミウマ類の少～多程度の被害がみられた。
 - b 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布を行う。
 - c 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる成長段階であっても、同時に防除を行う。
 - d 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。
 - e ほ場内外の雑草や収穫終了ほ場の残渣は発生源となるので、早めに除去する。